「教育臨床総合研究 6　2007研究」

教育学部生による小・中学校体育に対する認識傾向

～ 過去10年間の調査の比較と体育授業に関する理解・考察の分析から ～

A Study of Trends toward University Student's Understanding of P.E in Compulsory Education.

廣　兼　志　保*　　平　井　　章**
Shiho　HIROKANE　　Shou　HIRAI

要　旨

初等体育科の指導法及び専門科目の授業を担当する２名の教員が、各々の視点から、教員養成課程学生の体育授業に対する認識傾向を明らかにする。

○視点１＝小・中学生時代の回想により、体育授業に関する意識調査を実施。以前に実施した同内容の調査結果との比較を通して、その特徴を明らかにする。

○視点２＝本学部の開講科目「初等体育科内容構成研究」での学習体験を通した学生の内省文から、体育授業に関する理解・考察の様相を明らかにし、体育科における実践的知識の基盤形成の過程を探る。

［キーワード］　子どもの危機、教科の嗜好、体育科の特徴、運動の学習、体育の評価、教員養成課程学生の体育授業に関する理解・考察、質的データの分析

Ⅰ　はじめに

本研究は、本学部で初等体育科の指導法及び専門科目の授業を担当する２名の教員が、各々の視点から、教員養成課程学生の体育授業に対する認識傾向を明らかにするものである。

筆者（平井）は、教育課程審議会等で指摘されてきた小・中学校体育の課題についてかって児童・生徒であった教職指向の大学生を対象にして彼らが受けてきた小・中学校の体育に関する調査を実施し、その認識傾向より具体的な課題の把握を試みてきた。

この調査から、①体育科は、子ども達に大変人気がある教科である。運動領域はボール運動・球技に人気がある。これらの学習を通して特に人間関係、運動技術の習得を身に付ける教科と認識している。②体育科で身に付けた内容は、生活を豊かにするものとして認識しているが、日常生活に活用する割合は、認識している程ではない。③体育科は、小・中学校段階での教育

*島根大学教育学部初等教育開発講座
**島根大学教育学部健康・スポーツ教育講座

に必要不可欠の教科である。ことを明らかにした。

今回は、明らかにされた諸事項が５年及び10年間においてどのように変容してきたかを確認すると共に特徴の見られる項目を検討する。

一方、筆者（廣兼）は、教員養成課程の学生が小学校の教科に関する専門科目の学習体験からどのような実践的知識に関する理解・考察を得たかについて、質的データによる考察を試みる。

中井・岡沢（1999）によれば、体育の授業実施場面において教師の状況認識や意思決定は教師がもつ「授業に関する知識」に支えられているという。これらの「授業に関する知識」は、一般教授学ですでに解明されているように「教材内容」「教授方法」「子ども」の３つの基礎的な知識領域とそれらの複合された４つの知識領域との合計７つの知識領域から構成されている。

では、このような授業実践を支える知識はいかにして形成されていくのであろうか。その形成過程の出発点にあたる教員養成課程での教科に関する授業を通して、学生達は何を理解・考察し、それをいかにして授業実践に「使える」知識へと変換していくのだろうか。それを知るためには、まず「学ぶ側」から「教える側」へと視点を転換していく時点の、学生達の体育授業に対する理解・考察の様相を明らかにすることが必要である。本研究では、学生達が初めて「教える側」の視点をもって小学校体育の授業を学んだ体験から得た、小学校の体育授業に関する理解・考察の事例を分析することによって、その手かがりを得たい。これは体育科における実践的知識の基盤形成過程の解明に向けての基礎的な研究資料を得ようとする試みである。

Ⅱ　調査及び分析方法

調査および分析は、以下の要領により、２名の研究者が分担して実施し、各自その結果を考察した。下記の１．２．及び調査結果の分析の１．２．とまとめの１．２．については平井が、下記の３．４．及び調査結果の分析の３．とまとめの３．については廣兼が分担・執筆した。

１．対象者は、調査１で、教職科目である「初等体育科教育法[1]」受講生142名（男子53名、女子88名　不明１名）である。また、同様に調査２で、受講生101名（男子40名、女子61名）である。さらに調査３で受講生121名（男子45名、女子76名）である。実施日は、調査１が平成８年５月（1996）、調査２が平成13年４月（2001）である。さらに調査３が平成18年５月及び10月（2006）である。

２．保健体育科に関わる調査（資料１）を作成し、これにより回答を求めた。調査の内容は、①教科の嗜好（Ｑ４，Ｑ５，Ｑ６，Ｑ７）及び教科内容の嗜好（Ｑ８，Ｑ９）、②教科の特徴（Q10，Q11，Q12，Q16，Q17）、③教科内容の習得（Q13，Q14，Q15）及び評価（Q18，Q19，Q20）、④教科の評価（Q21，Q22，Q23）の４事項の合計20項目よりなるものである。

３．質的データによる考察の対象者は、平成17年度後期の「初等体育科内容構成研究[2]」受講生（男子21名、女子18名）および平成18年度前期の「初等体育科内容構成研究」受講生（男子16名、女子31名）合計86名である。このうち67名は調査３の対象者と同一の人物達である。実施日は、平成17年２月５日および平成18年７月24日である。いずれも14回の授業が終了した後15回目の授業時に受講生が書いた自由記述式の内省文を考察の対象とした。

４．３．においては、内省の手かがりとして、以下の観点を設定し対象者に提示した。

「『教材となる運動の特徴』『授業づくり』『教具の使い方』『指導法』『技能』『子どもの興

味・関心・意欲』『安全』『子どもの心身の発達』などに関して、『初等体育科内容構成研究』の授業を通して、わかったことや考えたことはありますか？それはどんなことですか？具体的な例もあげて書きましょう。」

これにより得られた記述内容を「授業に関する知識」の基盤を形成する理解・考察ととらえ、以下の手順により対象者の体育授業に関する理解・考察の様相を分析した。

① 記述された文章を、意味のまとまりによって読点で１文ずつに区切り、中井・岡沢（1999）の示した体育科における授業についての教師の「知識」領域に相当する「理解・考察」領域を設定し分類した。すなわち「教材内容に関する理解・考察」「教授方法に関する理解・考察」「子どもに関する理解・考察」「教材内容と教授方法に関する理解・考察」「教材内容と子どもに関する理解・考察」「教授方法と子どもに関する理解・考察」「教材内容・教授方法・子どもに関する理解・考察」の７領域である。

② これらの分類結果をうけて分類された文の数が多い領域を取り上げ、その内容について分析した。すなわち、各領域に分類された文をKJ法により細分類し、下位項目の構造と、学生の理解・考察の様相について明らかにした。データの信頼性と妥当性を保障するため、２人の研究者の分類結果が一致した文のみを考察の対象とした。

Ⅲ　調査結果の分析

１．調査３

（１）対象者の属性

１）学年と所属

回答者は、２・３年生が全体の約91％を占める。また、所属課程はほぼ全員が学校教育教員養成課程である。これは、「本授業科目」の履修資格が２年次となっていること、また、本課程で必修の科目であることによる。

２）性別

男子が約37％、女子が約63％である。

（２）教科の嗜好及び教科内容の嗜好

１）教科の嗜好

小学校時代の体育が「好き」であったと回答した者が約67％である。男女別で見ると男子で91％弱、女子で53％の者が回答していることから男子の方が好意的と思える（表１）。

一方、中学校時代の保健体育が「好き」であったと回答した者は約54％弱である。男女共に「好き」と回答した者の割合が小学校に比較して低い。また、「好き」「嫌い」と回答した理由を複数回答で求めたところ、「楽しかった」（約71％）、「息抜きが出来る」（26％）と回答する者が多かった。

表１　小・中学校時代の体育の嗜好性（％）（n＝121）

	大変好き	好き	普通	嫌い	大変嫌い
小学校	41.3	25.6	22.3	8.3	2.5
中学校	22.3	31.4	30.6	13.2	2.5

2）教科内容の嗜好

小学校体育で興味を持てた領域としては、圧倒的に「ボール運動」を上げた者が多く、以下「水泳」、「陸上運動」、「器械運動」となる。男女別でもほぼ同様である。

中学校では、「球技」の人気が全体の80%強を占め、以下「陸上競技」、「水泳」などと続く。男女別でもほぼ同様である（図１）。

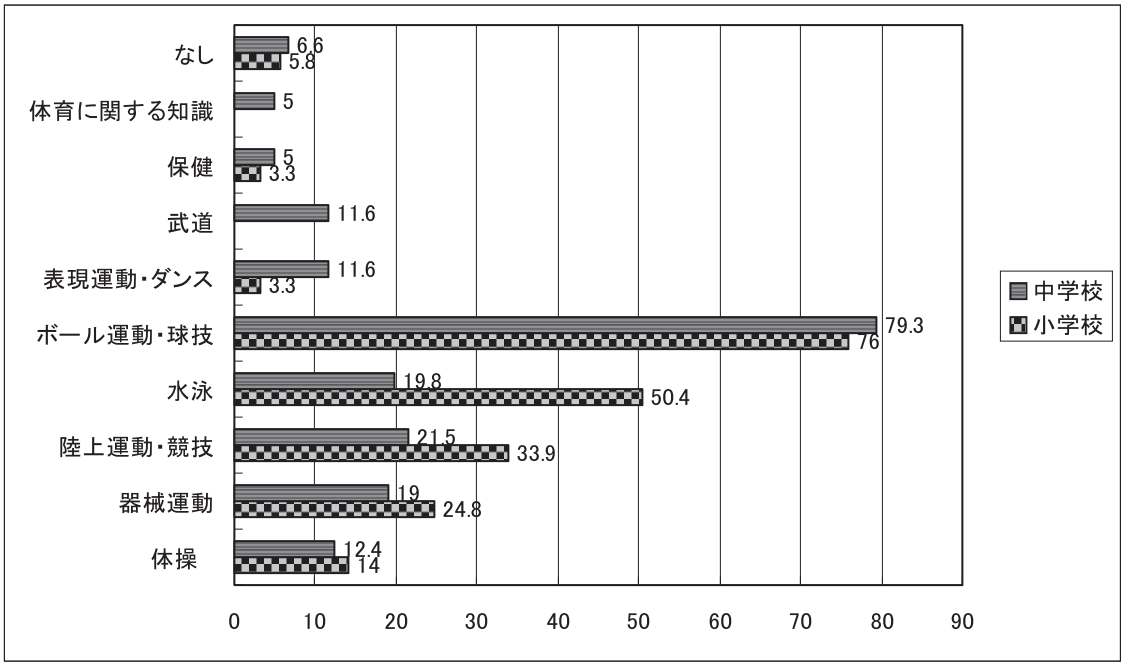

図１　小・中学校の教科内容の嗜好性（複数回答）（%）（n＝121）

（３）教科の特徴

体育及び保健体育科の特徴を捉えるために「授業での人間関係」、「わかることとできること」、「男女共習」、「体育の先生」について回答を求めた。それによると、人間関係の重要性を指摘する回答が91%以上にも達し、体育の授業が人間関係を学ぶ貴重な機会となっていることがうかがえる。「わかることとできること」については、約48%の者がどちらも大切と考えているが、体育では「できること」にウエイトを置くという印象　(37%)を持つ傾向にあった。また、「男女共習」では約39%の者が賛成の意見を示し、約39%弱の者がどちらでも良いと回答している。さらに、体育教師の傾向の一端として、体育教師は授業より課外活動に熱心であり（36%)、どうとも言えない（46%)、あまり民主的とは思えない（20%弱）と回答する傾向があり、(特に男子にその傾向が強い)、十分に心に留めておく必要がある。

（４）教科内容の習得及び評価

１）内容の習得

内容の中核と考えられる各種運動技術の習得方法やその場については、当然の事ながら教師の指導によって運動技術を習得した者が約64%であるが、習得の場として「授業」のみならず「課外活動」を上げている者の割合がかなり高い（29%)。また、「友達との遊び

の中で」と回答した者が57%を占め、授業以外の遊びでの運動技術習得の意味は見逃すことの出来ないことである。運動技術を上達させる条件としては、約89%の者が「反復練習」、34%の者が「場の工夫」、「適切な言葉」（48%）と補助的用具・器具（46%）をそれぞれ回答している。そして、その場は「授業」より「課外活動」の方が多いと51%の者が回答している。従って何のための授業なのか、授業のあり方が改めて問われなければならない。

2）教科内容への評価

体育や保健体育で学んだことをいかに評価しているのだろうか？83%以上の者が体育で学んだ事柄の多くは他の多くの技能系教科と同様に「生活を豊かにするもの」として認識していることが理解される。そしてこれらの事柄が実際に日常生活に役立っていると回答している（79%）。さらに「生活を豊かにするもの」と回答したもののうち日常生活のどんな点で役立っているかについては「運動を楽しめるようになった」（41%）や「スポーツに関心が持てるようになった」（38%）、「健康･安全に注意するようになった」（33%）とそれぞれ回答する割合が多かった。

（5）教科の評価

教育活動全体の中で、体育科及び保健体育科についてその評価は、約95%の者が「体育は教育にとって欠くことのできない教科である」とその重要性を認識している。これは男女共ほぼ同様な傾向である。

教育活動における体育の重要性に基づいて、教科時間の増減の有無について回答を求めた。それによると、小学校の体育では、69%以上の者が「現状のままでよい」と回答しているが、現行の体育の時間より「増やすべきだ」としている者も18%あり、特に男子にその期待が大きい。一方、中学校の保健体育については、68%の者が「現状のままでよい」と回答している。

従って、教科時間の増加は、男子回答者に支持する者の割合が高い傾向にあるが、女子はそれ程でもないことがわかる。教科の重要性の認識と教科時間の増加希望とは必ずしも相関がある訳ではないようだ。

2．3つの調査の比較から

これまでの3回の調査から、調査1（以下前々回の調査と記す）、調査2（前回の調査と記す）、調査3（今回の調査と記す）各々の項目のうち特徴の見られるものについて取り上げる。

（1）対象者の属性

1）学年と所属

授業科目の履修条件より、3つの調査とも2・3年生が対象者の80～90%を占める。特に中心となるのは2年生である。

2）性別

3つの調査とも男子が約40%、女子が約60%である。この割合は、教育学部の近年の男女比構成を反映している。

（2）教科の嗜好

小学校時代の体育が「大変好き」及び「好き」であったと回答した者の割合が67%以上

あるが、調査１と調査２よりも多少減少している。男女別では、前２回の調査で女子よりも男子の割合がやや高く、男子の方が好意的と思える。今回の調査では、「大変好き」と答えた男子が67％あり、女子との差が拡大している。

中学校時代の保健体育では、「大変好き」及び「好き」であったと回答した者の割合が53％程度であり、小学校での体育の割合より減少する。また、前回の調査より今回の方が小学校及び中学校で約10ポイント減少している（表２）。

また「好き」「嫌い」の理由として「息抜きが出来る」、「楽しかった」の２つの理由を回答した者が両調査ともかなりの割合に達するが、今回の調査では「楽しかった」が前回より約10ポイント、「息抜きが出来る」も約13ポイント低下している。

表２　中学校時代の体育の嗜好性（％）（調査２　n＝101　調査３　n＝121）

	調査２			調査３		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計
大変好き	26.4	10.2	16.9	37.8	13.2	22.3
好き	39.6	40.9	40.1	33.3	30.3	31.4
普通	28.3	31.8	30.3	26.7	32.9	30.6
嫌い	1.9	13.6	9.2	2.2	19.7	13.2
大変嫌い	3.8	3.4	3.5	0.0	3.9	2.5

２）教科内容の嗜好

小学校の体育で興味を持てた領域としては、３調査とも「ボール運動」を上げた者が圧倒的に多い。以下「水泳」、「陸上運動」、「器械運動」の順に人気があり、男女別では女子に「水泳」の人気が高い（図２）。

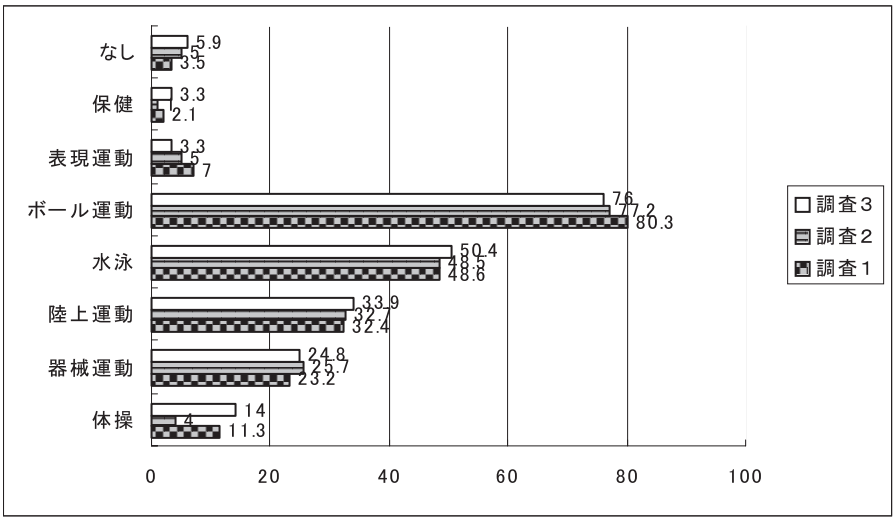

図２　小学校における教科内容の嗜好（複数回答）（％）（調査１ n＝142　調査２ n＝101 調査３　n＝121）

3）教科の特徴

授業での人間関係の重要性を上げる割合が3調査とも大変高く（85%以上)、体育の授業は人間関係を学ぶ絶好の機会としての特徴を持つことを指摘できる。また「わかることとできること」については、前2回の調査では約60%の回答者がどちらも大切であると考えているが、今回は約10ポイント減少している。体育では「できること」をより大切と考えている傾向にあり、この事は前回の調査も同様である。「男女共習」については、両調査とも約40%の者が賛成の意見を示し、約40%の者がどちらでも良いと回答している。これは前2回の調査とほぼ同様な傾向である。さらに「体育の先生」の項目では、体育教師が授業よりも課外活動に熱心だとする意見が30%～40%ある。その割合は前々回の調査から一定の傾向を示しているものの、男子においては逆にその傾向が強くなっている。

（3）教科の内容の習得及び評価

1）内容の習得

各種運動技術の習得方法やその場については、両調査とも教師の指導によって運動技術を習得した者の割合が高かったものの、教師以外の大人の指導でとする回答が徐々に増えつつある。教師の適切な指導による体育の授業中での運動技術習得の低下が懸念される。

習得の場は、授業のみならず「課外活動」や「友達との遊びの中」とする回答が相変わらず多い。運動技術の習得方法やその場としては、遊びの中と学校生活の中で運動技術を習得し、遊びの中では自分自身や友達との中で、学校生活では授業と課外活動でそれぞれ習得したことが伺える。この傾向は運動技術を上達する条件は、「反復練習」、をほとんどの者が上げている。加えて、「場の工夫」、「適切な言葉」を前2調査とも男女それぞれ共通に回答している。今回は、さらに「補助的用具・器具」、「視聴覚機器」を上げる者が増加している。そしてその場は「授業」より「課外活動」の方が多いと全体で60%前後の者が回答しており、また、両調査とも男子（70%前後）が女子（50%程度）よりその傾向が強いことがうかがえる。この傾向は、変わらない。

2）教科内容への評価

体育や保健体育で学んだ事への評価は、「生活を豊かにするもの」として評価している。その割合も変わらず、80%以上の者が回答している。そして「日常生活に役立っている」とする回答も同程度で、80%弱の割合になっている。さらに、「生活を豊かにするもの」と回答した者のうち、日常生活のどんな点で役に立っているかについて複数回答を求めたところ、「スポーツ全般に関心が持てるようになった」、「運動を楽しめるようになった」が約50%程度である。その他「健康・安全に注意するようになった」「体力作りをするようになった」であるが、特に、「体力作りをするようになった」は調査をするごとに上昇している。従って、体育の授業を受けることで運動全般に関心を持ち、適度な運動を行うことによって体力作りをするようになったことが伺える。現代社会がこれまで以上に体力作りの必要性を要求していることの証であろう。

（4）教科の評価

体育は教育にとって欠くことの出来ない教科であると評価する者が多く、3調査とも95%以上である。特に前回の調査では、女子が100%の賛成を示した。今回の調査では、男子が100%であった。従って、変わらず教育活動全体の中で体育科を重要な教科として認識していると考えて良いと思える（表3）。

表３　教育における体育科の必要性について（%）（調査１　n＝142　調査２　n＝101　調査３　n＝121）

	大いに賛成	賛　成	どちらでもない	反　対	大いに反対
調査１	35.9	58.5	4.9	0.0	0.7
調査２	39.6	57.4	3.0	0.0	0.0
調査３	38.0	57.0	5.0	0.0	0.0

教科の重要性の認識に関係して、教科時間の増減の有無について回答を求めた。まず小学校体育で３つの調査とも現状のままで良いとする意見が多いが、前回の調査に続いて男子に「増やすべきだ」とする意見が見られる。中学校の保健体育でも３つの調査とも大多数の者が「現状のままで良い」と回答しているが、「増やすべきだ」とする回答が男子に多く見られるのが特徴である。

３．内省文の分析にみる教育学部生の体育授業に関する理解・考察について

（１）対象者の属性

１）学年と所属

回答者の学年は、１年生35名（40.7%）、２年生48名（55.8%）、３年生２名（2.3%）、４年生１名（1.2%）である。所属課程は全員が学校教育教員養成課程である。

２）性別

男子37名（43.0%）、女子49名（57.0%）である。

（２）授業に関する７つの領域からみた理解・考察の様相

中井・岡沢の先行研究[2)]をもとに、対象者の書いた内省文（全603文）を以下の領域に分類した。各領域の定義は表４に示す。

表４　授業に関する理解・考察の領域（中井・岡沢[2)]をもとに廣兼が作成）

領　域　名	定　　義
教材内容に関する理解・考察（基礎領域）	教材の中心的概念や概念間の相互関係、他の教材との関係などに関する記述
教授方法に関する理解・考察（基礎領域）	学習指導法、授業構造、授業運営に関する記述
子どもに関する理解・考察（基礎領域）	一般的な発達段階における子どもの認知的・情意的・技能的特徴などに関する記述
教材内容と教授方法に関する理解・考察（複合領域）	ある教材を教えるときに、教師が用いる説明、演示、概念の表現、例証などに関する記述
教材内容と子どもに関する理解・考察（複合領域）	ある教材について子どもが既に理解していること、子どもが持っている誤った考え、その教材に対する子どもの感情などに関する記述
教授方法と子どもに関する理解・考察（複合領域）	様々な特性やニーズを持つ子どもを教えたり、動機づけたりする方法などに関する記述
教材内容・教授方法・子どもに関する理解・考察（複合領域）	子どもの誤りやつまづきを防止する、あるいはケアするための教授方法のように、３つの領域が複合したところに関する記述

この定義にしたがって内省文を各領域に分類したところ、以下のような結果が得られた。「教授方法に関する理解・考察」に分類された文が最も多く175（全体の29.0%）である。次に多いのは「教授方法と子どもに関する理解・考察」に分類された文で130（以下同じ21.6%）である。この２つの領域に分類される文を合わせると305（50.6%）となり、全体の約半数を占める。このことから、授業後の学生達の理解・考察は、主に教授法に向けられていることがわかる。次いで「教材内容に関する理解・考察」が103（17.1%）、「教材内容と子どもに関する理解・考察」が65（10.8%）と続く。「教授方法」及び「教材内容」に関する理解・考察の領域は、いずれも、「教授方法」「教材内容」に関する基礎領域に次いで、「子ども」に関する理解・考察との複合領域に分類された文が多いという共通の傾向を示している（表５）。

表５　内省文の分類

順位	領　域　名	文の数（%）
3	教材内容に関する理解・考察	103（ 17.1）
1	教授方法に関する理解・考察	175（ 29.0）
7	子どもに関する理解・考察	17（ 2.8）
6	教材内容と教授方法に関する理解・考察	53（ 8.8）
4	教材内容と子どもに関する理解・考察	65（ 10.8）
2	教授方法と子どもに関する理解・考察	130（ 21.6）
5	教材内容,教授方法、子どもに関する理解・考察	60（ 10.0）
	合　計	603（100.0）

この結果は、「小学校体育科の各領域における教材の特徴を理解できるようになる」「小学校体育科の授業における各教材の取り扱い方を理解できるようになる」という目標の下に授業が実施されたことの反映であるといえよう。

一方、「子どもに関する理解・考察」は17（2.8%）と最も少ない。しかし、だからといって、学生達が子どもに関して理解・考察しなかったというわけではない。なぜなら、「教授方法と子ども」「教材内容と子ども」の複合領域に分類された内省文の内容をみると、子どもの認知的・情緒的・技能的特性に関する理解・考察を背景に、教授方法や教材内容に関する理解・考察を記述している文が多くあったからである。例えば、「子どもは、大人と違い視野が狭く、何かに熱中すると周りが見えなくなってしまうこともあるので、安全には特に気を使う必要があるだろう。」「例えば、陸上運動の際、50mをただ走るのではなく、何秒間では何mでゴールすることができるかと、タイムによって走行距離を決めていく授業の進め方は、苦手な子どもにとって授業が苦にならないと思われる。」「同じことをずっとやっていられない低学年への指導と、ある程度こなせる高学年への指導とを一緒にしてはいけない。」などの記述である。

したがって、内省文の分類からは、学生達が子どもに関する理解・考察と関連づけながら指導法や教材の特徴などを理解・考察しようとしている姿勢を読み取ることができるといえる。

（3）　体育授業の指導法に関する理解・考察の構造と様相

次に、各領域の内容を細分類することで学生の理解・考察の様相を探っていく。紙面の都合上、今回は「教授方法に関する理解・考察」「教授方法と子どもに関する理解・考察」の２領域を取り上げ、各領域に分類された全ての文をKJ法によりテーマごとの下位領域に細分類した。分類の結果は後述の通りである。各領域名は、各テーマにそって筆者（廣兼）が命名した。

1）「教授方法に関する理解・考察」の分析

「教授方法に関する理解・考察」からは、「学習指導法」「授業構造」「授業運営」「教師行動」「教師としての心構え」の５つの下位領域が抽出された（図３）。これらの領域は、文のテーマによって、さらに下位のテーマ別グループに分類された[3]。まず５つのうち分類された文の数に着目し学生達の意識が何に集中しているかをみる。その結果最も多かったのは「授業運営」（81文．全体の46.3%）であった。次いで「学習指導法」（28文．以下同じ16%）、「教師行動」（27文．15.4%）と続く。よって、学生達は主に「授業の進め方」に意識を向けていることがわかる。

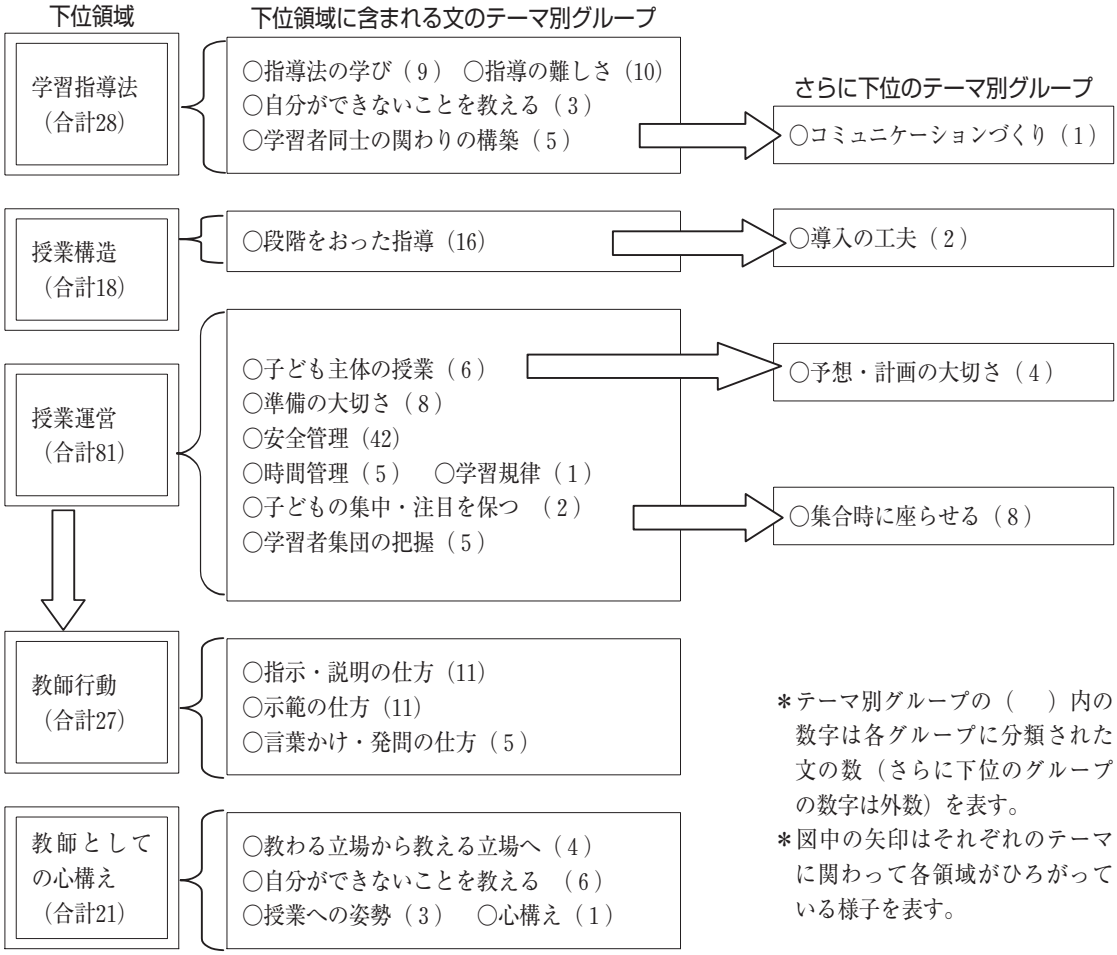

図３　「教授方法に関する理解・考察」の構造

次に、各下位領域からテーマ別グループを抽出し、「教授方法に関する理解・考察」の構造を明らかにしたい。結果を以下にまとめた。

○「学習指導法」からは、「指導法の学び・大切さ」「指導の難しさ」「自分ができないことを教えるとき」「学習者同士の関わりの構築」の４つのテーマ別グループが抽出され、このうち「学習者同士の関わりの構築」からは、さらに下位のテーマ別グループとして、関わりの構築のための具体的な手だてとなる「コミュニケーションづくり」が抽出された。

○「授業構造」からは、「段階をおった指導」のテーマ別グループが抽出された。このうち「段階をおった指導」からは、さらに下位のテーマ別グループとして、段階をおった指導における具体的な手だてとなる「導入の工夫」が抽出された。

○「授業運営」からは、「子ども主体の授業」「準備の大切さ」「安全」「時間管理」「学習規律」「子どもの集中・注目を保つ」の７つのテーマ別グループが抽出され、さらに下位のテーマ別グループとして「準備の大切さ」からは「予想・計画の大切さ」が、「子どもの集中・注目を保つ」からはその具体的な手だてとなる「集合時に座らせる」が抽出された。

○「教師行動」からは、「指示・説明」「示範」「言葉かけ・発問」の３つのテーマ別グループが抽出された。「教師行動」は、授業運営のための授業中の教師の行動を意味することから、本来「授業運営」の領域に含めるべき領域であるといえるが、今回の分析結果では、さらに３つの下位グループを派生させていることから、独立した領域として扱うこととした。

○「教師としての心構え」からは、「教わる立場から教える立場へ」「自分ができないことを教えるとき」「元気のよさ・授業への姿勢」「心構え」「今後の課題」の５つのテーマ別グループが抽出された。

よって、最もひろがりがみられたのは「授業運営」の領域であるといえる。「教師行動」の領域の内容と併せて考えると、目に見える具体的な授業の進め方や行動の仕方に関する理解・考察に多く意識が向けられているといえる。

また、少数だが「教師としての心構え」から抽出された「教わる立場から教える立場へ」は、学生達が初めて教える側の視点をもったこの時期の認識傾向の特徴を示している。

他に「安全管理」に関する理解・考察の文が目立って多いことも特徴的な傾向である。これは授業中の様々な場面で授業者から安全に関する注意・指導があったことによるものである[4]。

２）「教授方法と子どもに関する理解・考察」の分析

「教授方法と子どもに関する理解・考察」には、当初130文が分類されていたが、細分類の作業にあたって、両名の研究者の分類結果が一致したのは、合計125文であった。よって、この125文を今回の考察の対象とした。この領域からは「学習指導法」「発達に応じた指導」「授業構造」「授業運営」「教師行動」「子どもの興味・関心・意欲・楽しさの大切さ」「体育授業で育てたいもの」の７領域が抽出された（図４）。このうち、「学習指導法」「授業構造」「授業運営」「教師行動」の４領域は「教授方法に関する理解・考察」の構造と共通している。一方、新たに「発達に応じた指導」「子どもの興味・関心・意欲・楽しさの大切さ」「体育授業で育てたいもの」の３領域が抽出され、「教授方法に関する理解・考察」

にはあった「教師としての心構え」は姿を消している。新たに抽出された３領域はいずれも子ども理解に関わるものであり、この点に「教授方法と子ども」に関する複合領域としての特徴がみられるといえる。

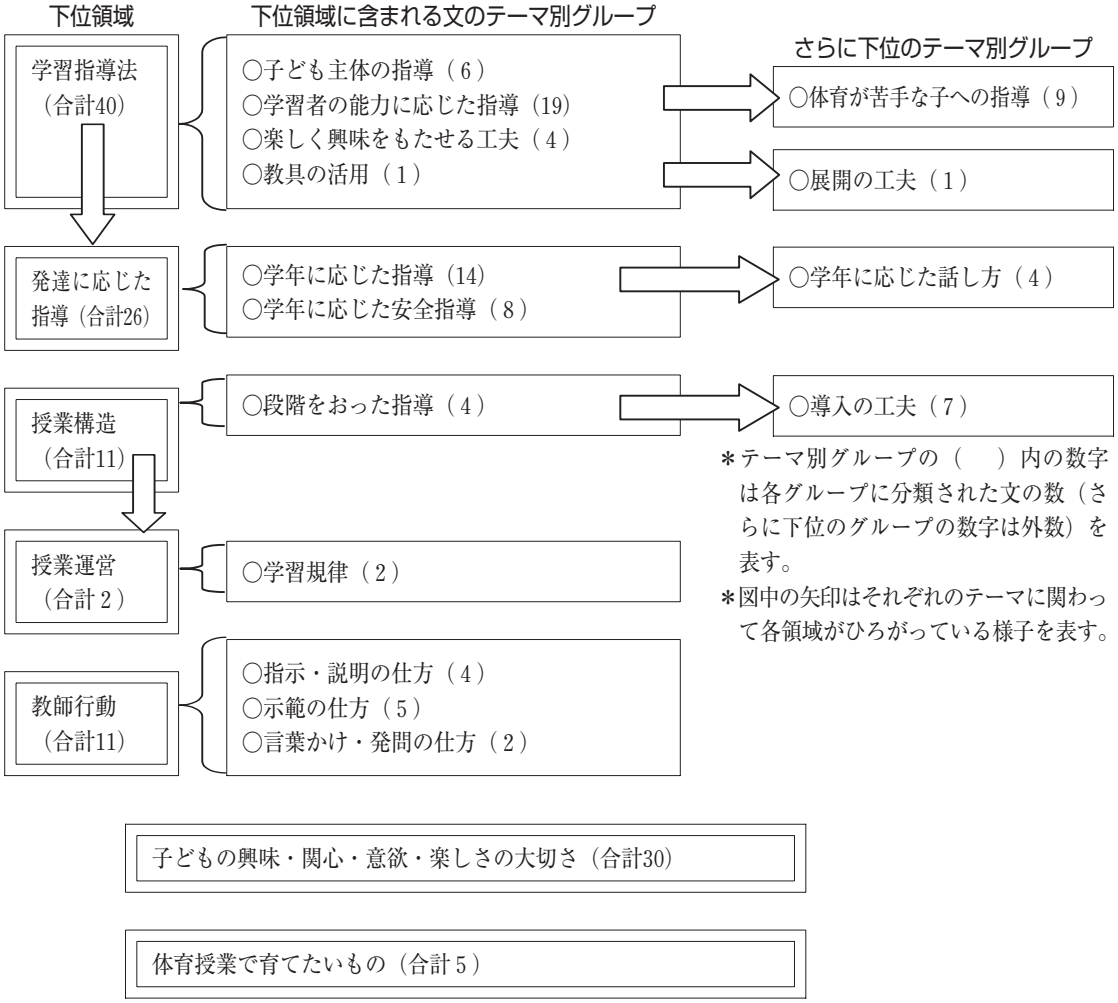

図４　「教授方法と子どもに関する理解・考察」の構造

分類された文の数が最も多かったのは「学習指導法」（40文．全体の32.0%）であり、以下「子どもの興味・関心・意欲・楽しさの大切さ」（30文．以下同じ24.0%）、「発達に応じた指導」（26文．20.8%）と続く。学生達が、子どもの状態・状況に応じた指導のあり方や、子どもの興味・関心・意欲を引き出す楽しい授業を志向していることがわかる。

これらの７領域各々から抽出されたテーマ別グループは以下の通りである。

○「学習指導法」からは、「子ども主体の指導法」「学習者の能力に応じた指導」「楽しく興味をもたせる工夫」「教具の活用」の４つのテーマ別グループが抽出され、さらに「学習者の能力に応じた指導」からは、下位のテーマ別グループとして「体育が苦手な子への指導」が、「楽しく興味をもたせる工夫」からは下位のテーマ別グループとしてその具体的

な手だてとしての「展開の工夫」が各々抽出された。

○「発達に応じた指導」からは、「学年に応じた指導」「学年に応じた安全指導」の２つのテーマ別グループが抽出され、さらに「学年に応じた指導」からは、下位のテーマ別グループとしてその具体的な内容としての「学年に応じた話し方」が抽出された。

○「授業構造」からは、「段階を追った指導」のテーマ別グループが抽出され、さらに下位のテーマ別グループとしてその具体的な手だてとしての「導入の工夫」が抽出された。

○「授業運営」からは、「学習規律」のテーマ別グループが抽出された。

○「教師行動」からは、「指示・説明」「示範」「言葉かけ・発問」の３つのテーマ別グループが抽出された。

○「子どもの興味・関心・意欲・楽しさの大切さ」と「体育授業で育てたいもの」からは特にテーマ別グループは抽出されなかった。

これらのことから、最もひろがりがみられたのは「学習指導法」の領域であることがわかる。「学習指導法」については、学習者の個人差（技能レベル・意欲・ペースの違い）に対応した指導の必要性、そのためには具体的にどう指導したらよいかという疑問や不安、自分なりの対応策などについての記述が複数あった。「学習者の能力に応じた指導」「体育が苦手な子への指導」に対する学生達の関心の高さが反映されているといえる。

Ⅳ　まとめ

１．調査３について

（１）児童・生徒は、体育・保健体育が大変好きである。男女別では、男子にその割合が高い。好きな理由は、「楽しい」とするものであり、運動領域は、ボール運動・球技に圧倒的人気がある。以下「水泳」「陸上運動・競技」である。男女別でもほぼ同様である。

（２）体育科及び保健体育科は、運動技術を身に付ける以上に人間関係を学ぶ場であると捉えている。体育では、わかることとできることどちらも大切であるが、できることにウエイトをおく傾向にある。この傾向は男子に高い。同様に男子の傾向として、体育教師は課外活動に熱心であるとする意見もある。

（３）運動技術の習得の場は、授業での教師の指導のみならず、それ以外での友達との遊びの中でとする意見が多い。運動技術を上達する条件は、圧倒的に反復練習、以下適切な言葉、補助的用具・器具、場の工夫を上げている。

体育で学んだことは生活を豊かにするものとして認識している。そして、日常生活では、運動を楽しめる、スポーツに関心が持てる、健康・安全に注意するようになったと回答している。

（４）体育科及び保健体育科は、男女とも教育になくてはならない教科であると認識している。

２．10年間の変容について

体育科及び保健体育科は、児童・生徒達に大変好まれている教科であることに変わりない。教科が好まれる理由のトップは、授業が楽しかったとするものであり、この理由も変わらない。運動技能習得の場や条件については、体育の授業だけでなく、大人や友達との遊びの中

で、反復練習を中心としながらとするものが多い。体育で学習したことは、生活を豊かにするものであると言う認識が一層高まりつつある。ただ運動を楽しんだり、スポーツに関心を持つだけでなく、積極的に体力づくりをするようになった変化がそこに見て取れる。体育は、小・中学校の教科になくてはならぬ教科であると変わらず認識されている。

3．内省文の分析にみる教育学部生の体育授業に関する理解・考察の様相

体育授業における内省文の分析から、学生達の理解・考察は、主に「教授方法に関する理解・考察」「教授方法と子どもに関する理解・考察」であることがわかった。これは、学生達が子どもに関する理解・考察と関連づけながら指導法を理解・考察していることを示している。

中でも「学習指導法」「授業構造」「授業運営」「教師行動」に関する理解・考察は、「教授方法に関する理解・考察」と「教授方法と子どもに関する理解・考察」の双方に共通して出現している下位領域であり、学生達の理解・考察内容の中核をなすと推察される。

学生達は、主に目に見える現象としての授業の進め方や授業中の教師の行動の仕方に対して意識を向けており、特に安全管理に対する意識が高い。

授業の進め方については、学生達は子どもの興味・関心・意欲・楽しさを引き出す指導を志向しており、その手だてとして、授業の展開の工夫などをあげている。

また、学習者の個人差への対応の必要性や、個人差に対して具体的にどんな指導をしたらよいかについても多く意識が向けられている。

要約すると、教員養成課程学生が体育授業で得た理解・考察は、主に授業の進め方や授業中の教師の行動の仕方についての内容が多く、子どもの興味・関心・意欲・楽しさを引き出す指導を志向し、個人差への対応を指導上の課題と捉えている、という傾向が明らかになった。

本研究では７つの領域のうち「教授方法に関する理解・考察」「教授方法と子どもに関する理解・考察」を取り上げ、その構造を探っていくことにテーマをしぼって内省文の分析を進めた。紙面の都合上取り上げられなかったが、分析作業の過程では、今回取り上げた領域だけでなく領域を超えて他の領域にも繰り返し出現する共通のキーワードがいくつかあることが見えてきた。記述内容の背景には、授業における共通体験があることも浮かび上がってきた。また、今回の分析によって抽出されたテーマ別グループのテーマのいくつかが、他大学で調査され明らかになった「教育実習生の心配事」のテーマ[5]とも共通することもわかった。

よって、今後質的データの分析を進展させる中で、これらの共通性や学習体験と理解・考察の内容との関係にも着目し、実践的知識の基盤について、何が中核なのか、どのような過程を経て形成されるのか、さらに解明を進めたい。

研究成果の教育活動への還元としては、今回明らかになった理解・考察の様相を手がかりに、対象授業の内容の改善や典型教材の開発、そして教科教育法のほか対象授業の後に履修する授業や教育実習の指導などへつなぐ発展的な学習内容・方法の開発に取り組んでいきたい。

おわりに

本研究では、２人の研究者が各々の視点から教員養成課程学生の体育授業に対する認識傾向を明らかにしてきた。そこから浮かび上がった共通のキーワードは「楽しさ」であった。学生達は体育科の授業における楽しかった過去の体験を肯定的にとらえ、学習者から授業者への立場の転換地点にある今、楽しい授業づくりをめざしている。学習者を動機づける「楽しい体験」の力に改めて気づかされる結果となった。この「楽しさ」の内容や意味合いを検討しつつ、体育授業に関する知識・理解を深める学習のあり方をさらに探求していきたいと考える。

＜註＞

1「初等体育科教育法概説」は小学校の各教科の指導法にあたる必修科目である。

2「初等体育科内容構成研究」は小学校の教科に関する専門科目にあたる選択科目である。

3 図中の５つの領域に分類された文の合計数は、各テーマ別グループに分類された文の総計を示す。

4 学生達の内省文にその旨記述してあるものが多かった。

5 木原[1)]（2006）： 50－52．参照

＜引用・参考文献＞

1）木原成一郎（2006）教員養成段階で求められる体育授業に必要な「実践的指導力」― 教員養成制度の改変との関係で ―．実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究．平成15～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書：46－56.

2）中井隆司・岡沢祥訓（1999）体育授業における教師の知識と意志決定に関する研究 ― 再生刺激法による体育授業研究の試み ―．スポーツ教育学研究．第19巻第１号：87－100.

3）中井隆司（2006） 授業研究の新しい展開 ― 授業の事例的研究 ―．体育科教育学研究．第22巻第１号：71－74.

4）岡出美則（1997）解釈学的方法による研究．体育科教育学の探究．大修館書店：370－379.

5）大友智（2006）授業研究の新しい展開 ― 授業の事例的研究 ―．体育科教育学研究．第22巻第１号：65－70.

6）高橋健夫他（2003）体育授業を観察評価する．明和出版：49－52.

保健体育科教育に関わるアンケート調査

この調査は、今後の義務教育段階における体育科、保健体育科教育の改善に資するために行うものです。ご協力くださいますようお願いします。尚、この調査結果は研究にのみ使用し、他の目的には使用しません。

記入の方法
該当する番号または記号に○印をつけてください。（　）内には文字または数字を記入してください。

問い

1．あなたの性別は？
　a　男　　b　女

2．あなたの学年は？
　（　　）回生

3．所属はつぎのどこですか？
　a　学校教育教員養成課程　（　　専修）
　b　生涯学習課程　（　　専修）　　c　その他　（　　専修）

4．あなたは、小学校時代の全体を通してみた場合、体育は好きでしたか？
　a　大変好きだった　　b　まあ好きだった　　c　ふつう　　d　嫌いだった　　e　大変嫌いだった

5．それまで体育が好きだったが、5年生や6年生の頃に嫌いになったというような記憶はありませんか？
　a　そのようなことがあった　　b　そのようなことはない　　c　そこまで詳しく覚えていない

6．中学校時代には保健体育はどうでしたか？
　a　大変好きだった　　b　まあ好きだった　　c　ふつう　　d　嫌いだった　　e　大変嫌いだった

7．6．の質問の「好きだった」あるいは「嫌いだった」の理由としては、以下のどのような要因が上げられますか？（複数回答可　☞その場合には順序をつける　◎○△など　以下同様）
　a　先生　　b　評価方法　　c　楽しかった　　d　息抜きができる　　e　その他（　　）

8．小学校の体育で、興味のもてた領域は下記のどれですか？（複数回答可）
　a　体操　　b　器械運動　　c　陸上運動　　d　水泳　　e　ボール運動　　f　表現運動
　g　保健　　h　何もなかった

9．中学校の保健体育で、興味のもてた領域は下記のどれですか？（複数回答可）
　a　体操　　b　器械運動　　c　陸上競技　　d　水泳　　e　球技　　f　武道　　g　ダンス
　h　体育に関する知識　　i　保健　　j　何もなかった

10．体育の授業では、内容のいかんにかかわらず男女一緒に学習すべきであると思う。
　a　おおいに賛成　　b　賛成　　c　どちらでもない　　d　反対　　e　おおいに反対

うらへ

11. 体育の授業では、人間関係が大切であると思う。
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どうとも言えない　d　思わない　e　全く思わない

12. 体育の授業では、認知的側面（わかること）と実践的側面（できること）とがありますが、やはり実践的側面のほうが大切であると思う。
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どちらも大切　d　思わない　e　全く思わない

13. あなたは各種運動技術を主にどのようにして習得しましたか？（複数回答可）
　a　体育の授業の中で教師の指導で　b　課外活動での教師の指導で　c　教師以外の大人の指導で
　d　友達との遊びの中で　e　遊びの中で自分自身で

14. 運動技能を上達させるにはどのような条件が必要と思いますか？（複数回答可）
　a　視聴覚機器　b　場の工夫　c　補助的用具・器具　d　適切な言葉　e　反復練習

15. 運動技能を上達させる場合は、体育の授業よりは課外活動のほうが多いと思う。
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どちらとも言えない　d　思わない　e　全く思わない

16. 体育の先生は、授業よりも課外活動に熱心であると思う。
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どうとも言えない　d　思わない　e　全く思わない

17. 体育の先生は、みんなの意見を尊重するなど民主的であると思いますか？
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どうとも言えない　d　思わない　e　全く思わない

18. 体育で学習したことは、音楽や美術とおなじように生活を豊かにするものであると思う。
　a　大変そう思う　b　そう思う　c　どうとも言えない　d　思わない　e　全く思わない

19. これまで体育で学習してきたことは、現在のあなたの生活に役立っていると思いますか？
　a　非常に役立っている　b　少しは役立っている　c　どちらとも言えない
　d　あまり役立ってない　e　全然役立ってない

20. 19. の質問で、aまたはbと答えた人にお聞きします。以下どのような点で役に立っていると思いますか？
　a　日常生活の中で運動を楽しめるようになった　b　積極的に行動できるようになった（複数回答可）
　c　体力づくりをするようになった　d　スポーツ全般に関心が持てるようになった
　e　健康、安全に注意するようになった

21. 体育科は、教育にとって欠くことのできない一つの教科であると思う。
　a　おおいに賛成　b　賛成　c　どちらでもない　d　反対　e　おおいに反対

22. 小学校において、体育の時間をもっと増やすべきだと思いますか？
　a　増やすべき　b　現状のままでよい　c　減らすべき　d　特に意見はない　e　その他
　（　　）

23. 中学校においてはどうですか。保健体育の時間をもっと増やすべきだと思いますか？
　a　増やすべき　b　現状のままでよい　c　減らすべき　d　特に意見はない　e　その他
　（　　）

以上で質問は終わりです。協力していただいて大変ありがとうございました。